

令和4年度 第1回豊田市生涯学習審議会 会議録

- 日時 令和4年8月8日(月) 午後1時30分～午後3時30分
- 場所 市役所南庁舎7階 南73委員会室
- 出席者 [豊田市生涯学習審議会委員](敬称略 50音順)
- 岩月明人 (とよたシニアアカデミー 事務局長)
- 上山 仁 (地域学校共働本部推進アドバイザー)
- 江里口あけみ (柳塚西町ささえ愛隊 副代表)
- 鬼木利瑛 (株式会社 eight 代表取締役)
- 小宮山利恵子 (株式会社リクルートスタディサプリ教育
AI研究所 所長) **【副会長】**
- 坂元玲介 (とよた多世代参加支援プロジェクト 会長)
- 戸田友介 (株式会社 M-easy 代表取締役)
- 藤本修身 (豊田市区長会 理事)
- 古川由香 (市民公募)
- 古澤三秀 (市民公募)
- 牧野篤 (東京大学大学院教育学研究科 教授) **【会長】**
- 三ツ石靖子 (豊田市市文化振興財団 交流館課 主任指導主事)
- 事務局 南良明 (生涯活躍部 部長)
- 加藤達志 (生涯活躍部 副部長)
- 小澤真里 (市民活躍支援課 課長)
- 和出広樹 (市民活躍支援課 副課長)
- 堀田真悟 (市民活躍支援課 担当長)
- 川瀬貴大 (市民活躍支援課 主査)

次第

- 1 開会
- 2 生涯活躍部長あいさつ
- 3 委員自己紹介
- 4 正副会長選出
- 5 議事「人生100年時代における学びのあり方と方策」
 - ・事務局説明
 - ・牧野委員からの情報提供
 - ・意見交換
- 6 閉会

■委員自己紹介 一人ずつ自己紹介

- 正副会長選出 会長に牧野篤委員を選任
副会長に小宮山利恵子委員を選任

■議事「人生100年時代における学びのあり方と方策」

- 事務局 資料に基づいて説明
- 牧野会長からの情報提供 資料に基づいて説明
- 意見交換

【委員意見】(要約)

- | | |
|------|---|
| A 委員 | 会長から情報提供のあった「横浜市の13歳の中学生が自治会役員に就任」という情報に感銘を受けた。自治区では、「人生100年」ということで働く世代が長くなり、区長をはじめとする役員の担い手探しに大変苦労している。自身も、再雇用が終了し、次の就職先が決まっていたが、頼み込まれて現在の立場を引き受けた。若い世代でも仕事を持ちながら自治区の運営に携わることのできる体制を整えたいと感じる。 |
| B 委員 | 県事業で「開拓プロジェクト」というものがスタートし、現在、市内の通信制高校と連携しながら事業を進めている。教頭先生からは、「入学生が非常に増え過ぎて困っている、3学年で2,000人以上となり先生たちが追い付いていけない。」という現状を伺った。その高校で、通信制高校向け初任者研修を民間団体で資金を出し合って行おうと考えている。
現に、経営する福祉事業所で通信制高校と一般高校のインターンの受け入れをしているが、学生の質は変わらない。中学校から高校に移るキャリア選択にどういった差があったのかが気になる。学校教育だけでない学びを企業や団体がどういった場を提供すると学校では学べない教育が受けられるか。学校教育、社会教育で何をやっているのかを理解し、現場では考えながらマッチングを行っている。豊田市は地域によって課題が異なるため、連携ニーズも様々と認識している。竜神交流館や中学校と連携しているが、地域によっても課題が異なるため、連携を取りながらやっていかなければ提案ができない、ということを感じている。 |
| C 委員 | 初任者研修は、教員か生徒向けどちらか。 |
| B 委員 | 高校1年～3年生の生徒向けである。初任者研修を受けると豊田市の福祉系の事業所でアルバイトができるというもの。 |
| C 委員 | 子どもたちの活躍と子どもたちをどう支えるかという観点でお話をいただいた。D委員いかがか。 |

D 委員

会長の情報提供にもあったが、「知の探索」が必要である。早稲田大学の入山教授が両利きの経営ということをよく仰っている。これは、良い経営は、堅実な事業と新規開拓事業が両立して初めて良い経営といわれる、というもの。この考えは、学びにも言えることではないかと感じている。これを踏まえて自身から「両利きの学び」を提唱している。これは、横軸は「知の深化」、縦軸は「知の探索」として捉えている。学校教育では、失敗がほとんどない「知の深化」ばかり。公教育はそこを追究してきたのかもしれない。これからの先行きが不透明で将来の予測が困難な状態であるVUCAの時代においては、「知の探索」を目いっぱいやっていく必要がある。一見無駄に見えて失敗の多いことであるが、将来の生涯学習者の芽になるかもしれない。今後の社会で「知の探索」をどう育てていくかが豊田市で議論になっていくのではないかと考える。

また、それを推進していくためには、地域の企業・組織・NPO・NGOなどの多様な主体と連携していくことが要となる。東京大学の松尾教授が学校教育を分析されており、学校では「知の探索」が全くできていないと言われている。今後、地域によってできることがあるれば、進めていくべきではないかと思う。

C 委員

イノベティブと盛んに言われているが、基本は探求して深める視点である。国では「アクティブラーニング」ということが言われているが、それをもとに2015年12月の答申があった。教職免許法や教育公務員特例法が法改正となり、新しく養成される教員は教科書を教えるだけでなく探究を導くためのカリキュラムに組み替えられている。アクティブラーニングは、直訳すると「活動的な学び」となるが、国ではそれをさらに「主体的、対話的な深い学び」と解釈していて、対話をしていくことと能動的に関わることの二つを絡めて深めていくことが問われている。教えるということも知識を伝えることだけでなく、探究して新しいものを発見していく喜びを身に付けていくことや教え合う関係が求められる。

GIGAスクール構想では、一人一台タブレットが配備されているが、使い方について学校間で格差が起きている。本来、教え合うことを前提で全体が高まっていくことが期待されている使い方であったが、そこを間違えると個人の学習の差で開きが生じる。学んだことを私物化しない、知識は公共財であるから、学んで得た知識を公共のものにしていくことを基本に社会の在り方を考えるということでもある。大人も子どもも一緒になって学ぶ機会をつくっていくことが問われている。

E 委員

12年前から旭地区に移住している。当時の高齢化率は42%、現在の高齢化率は58%となっている。どう地域と関わっていくべきか考える中で、地域の担い手が不足しているという現実に直面した。自治区の広報部長を10年程度、地域会議委員を4年、副会長も務め、地域のお役を全て務めるくらいであった。家族構成は、妻と子ども4人で、こども園・小学校でも色々なことに関わっている。子どもの1番上は5年生、2番目は3年生、3番目の1年生は学校に行っていない。どうホームスクリーングをしていこうか悩んでいる。今日の教育の話は、自分に

も引っかかる。当事者になってみるとどうしてこうかを悩む。先ほど、A 委員から定年後に再任用となるという話で、定年が延びていくと地域に帰ってこない。その中でどうしていけばよいかという話のとおり、本当に地域に帰ってこない。みなさんそのまま働きにいかれ、外に行かれたまま帰って来ない。そうすると、どう地域を維持していくか、という課題が大きくなっている。旭地区は 2,400 人くらいの人口で、自分が住んでいる築羽自治区はそのうちの 400 人程度。意思決定はしやすい地域であるため、小さなコミュニティの中では互いの顔が見え、みんなで学び合っていくという意味ではとてもやりやすい地域である。その中で行政の予算的なこともあると思うが、豊田市に合併して色々なことを山村部にさせていただいている。これは表現として正しいかは分からないが、充実したと思いつつも公共的な部分で手が回りきらない部分が少しずつ増えてきている。とは言えども、小さなところまで手をかけるということはお金的にもどうかというのは住民としても思う。それを昔であれば、地元の方たちは俺たちが材料だけ出してもらってやっていたとおっしゃっている。外に仕事をしにいくのではなく、そういうものをもう一度、地域の方たちが自分の手でやっていくような、労務や安全を考えると難しい分野であると思うが、地域や教育、福祉ごとをもう一度地域に取り戻しながら、地域の方が仕事を含めて関わっていくような、背中を子どもたちに見せていくことで子どもたちが活動に参加していく可能性が生まれる。豊田市には、地域予算提案事業やわくわく事業があり、地域の人たちが手を挙げ、発案をして予算化していくという制度がある。そこにはたくさんの学びがあるため、活動の姿を子どもたちに見せていくことも大切である。

C 委員

どの地域も定年延長、再任用で地域に戻る年齢が高齢化してきており、従来の町内会活動が維持できないなどの相談がよくある。地域組織を維持するためにはどうすべきか、他の組織を作ることが可能なのか、違うものを考えることができるのかなど、町内会で役を持った方がやるだけでなく E 委員の話のように、みんなでやっていきましょう、お互いにし合おうというような関係にしていくことも必要と思われる。

F 委員

地域では自治区活動をやっている程度だが、E 委員からあった大人が子どもに背中を見せる、という話につながることで、私には高校生・中学生・小学生になる子どもが 3 人いる。子どもが探求学習を受けてはいるが、大人が探求していないとか、わくわくしながら地域や社会に出ている姿を見ていないと、学校の中でいくら探求と言っても刺激はされない。そういうことを自分が子どもを産んだ時に思ったため、お母さんたちが自分をもっと自分の人生を生きて欲しいと思い、キャリア支援を始めている。その延長で、お父さんのキャリア支援も始めたが、その中で兆しとを感じる課題について述べたい。

最近、製造業で 1,000 人～2,000 人くらいの規模の会社から、定年が 65 歳義務になったので、大きく会社の制度を変えないといけない、その制度を変えるというのは義務のため雇用はする。ただ、条件があり、60 歳になった瞬間に残り 5

年の年収は半額以下、時給 1,000 円の仕事は警備員や清掃員をはじめ、こういった条件であれば採用するなどという制度に切り替わり始めている。豊田市では、バブル世代の会社員が 4 万人くらい働いている。そのうち、製造業が大きな割合を占めている。企業からは、その方々に 60 歳以上のキャリアを考えるような研修をやってほしいという要望がある。実際に研修を行うと、「やりたいことがない」「目標が立てられない」「定年後に何をしたらよいかわからない」「自分に何ができるかわからない」と言われる。その中で、自分の自己理解をして強みや自分は何にわくわくするのかということを考えてもらうと、趣味などで夢中になれることがある。今後、生きがい難民や生きがい難民予備軍がまちに溢れてくるのではという不安がある。ただ、自分のことを掘り下げていった先に自分が夢中になれることがわかってくると何を学びたいかがみえてくる。

当社では、市からの委託を受けてプロボノシナジープロジェクトを運営しており、プロボノ活動を通じて 30 代～60 代の方々が自分の強みや支援したいことを実践する中で、学び続けるという兆しが見えてきている。例えば、製造業で働いていた方がとよた福祉大学で学び、異分野に飛び込んでみると福祉が面白いと感じ、自身で NPO を立ち上げられた方もいる。学ぶだけであると自分を生かす場がないため、アウトプットの場が大切。自分を知り、生かせる場を探してそこに実践で飛び込んだ時にもっと学びたいと感じるのかもしれない。過去にプロボノの支援を受けた「一般社団法人 ドローンチーム Nadeshiko」という団体では、高齢者がドローンの操縦を覚えてそれを中学生に教えるプログラムを始めると、中学生と高齢者が交わる相乗効果で非常に良いプログラムになったという。単に学ぶだけでなく、子どもたちに教えることでのアウトプットがあると学びにつながり、自分の可能性が広がることで、子どもにとって「こんな大人になりたい」につながっていくと子どもの探求学習が効いてくるのではないかと実感している。

C 委員

情報提供でお伝えした横浜市の 13 歳中学生が町内会長に立候補した理由は、役員の方々がいきいきとしていることであつたという。子どもがそれに触れることで大人がいきいきとやっているのであれば自分もそうしたいと思ったそう。普通ならば、子どもが役員だなんて思うかもしれないが、町内会の規約を調べると年齢制限がないことがわかり、立候補した。大人がいきいきした姿を見せることが大事。これまでの社会は、年齢や性別で分けられることが多いため、そこをどうつなげるかがこれからの課題である。子どもたちのあんな大人になりたい、あんなことをやってみたいという思いを大人と一緒に実現していく関係が大事になっていくと思う。

G 委員

中学校教員を務めていて感じたのは、卒業した子供たちが進学、就職した子どもたちが高校を途中で辞める、仕事を辞める子が多く存在した。私が学年主任を務めることとなった際に、この学年自体の運営を任されたわけで、進学あるいは就職した時に自分で何か楽しめるようなことを仲間とともに何かを作り上げるこ

をすべきと感じた。そこでは、子どもたちに出番・役割・責任というのが必要となる。その子の感性・興味・関心など、どこに引っかかってくるか分からないが、失敗したら叱るというのではなく、自分たちで役割を考えさせ、自分たちがやることに責任を持たせ、楽しんでやることを伝えた。学校現場では、子どもたちに任せるよりも教員がルールを敷いた方が早く実行ができる。始めは時間が掛かるが、大人が寛容になることで、子どもたちが次はこうしたい、あんな上級生になりたい、など目標をもっていくことができる。中学校卒業後も、願いとしてはどのような集団に入ったとしても今までやってきたことを生かし、学校が小さくてもいいから新たな仲間を作って何かを楽しむという学びの場になるとよい。

過去に、自治区からの依頼で避難訓練を行った際も、これまでは1時間半程度かかっていたことが、20分～30分で終わることができた。それは、地域の方が子どもたちの言うことであればすんなりと聞くというのが理由であった。それ以外でも地域から沢山の声掛けをいただき、中学生が活躍する場を提供することができた。地域の方が中学生の活躍する姿を見ると、子どもたちを見る目が変わる。一番変わったのは大人かもしれない。地域での活躍が広がると子どもと大人の関わりが増えてくる。日本人は自己肯定感が低いと言われているが、人に認められたりすることで育むものかと思うため、そういった場を社会全体が与えていけるとよい。また、どのような出番をつくっていくかを大人が考え、子どもが実行するというような社会になっていけることを願っている。

C 委員

今日のテーマでもある共に生きる、生きるをともにする共生ということ、多様性ということを含めて、人々が行動を受け止め合い、また受け入れ合い、認め合う環境をつくるということに関わってくるお話だと思う。日本人の自己肯定感が低いのは色々な調査でも明らかであるが、これは自己肯定感と捉えると低くなる傾向がある。また、自己満足感が低いことも世界的には有名であるが、他方で、聞き方を変えると数値が上がることもある。例えば、「あなたが経験したことに関して満足をしているか」と聞くと非常に数値が下がる。言い方を変え、「あなたが経験したことは有意義だったと思うか」と聞くと数値が上がる傾向がある。そこには、日本の文化の影響のようなものがあり、自分をあまり高く評価してはいけないというような風潮があるといわれる。けれども、意義があったかを聞くと「ある」と答える人が多くなる。その意味では、幸せ感や肯定感のようなものを個人が獲得するものとするよりも、互いの関係性の中で得られるものだという考え方を重視していく視点も必要なのかもしれない。

H 委員

私は、榎塚西町ささえ愛隊というボランティア団体を地域で立ち上げた。地域でボランティア活動を行っている。当初は、高齢者対象のサロンであったが、現在は多世代交流サロンとして、子どもと高齢者をはじめとする地域の交流拠点となっている。そこでは、小学生が接客などを行っている。最初のうちは子どもが戸惑っていたが、子どもがやることに対して、高齢者は言うことを聞く。自身、地域で幸せに

暮らしていくには自分がこの地域の住民であるときちんと意識しないといけないと思ったことが最初で、子どもたちの顔が見えず、少し声を掛けたら不審者に思われた経験が活動を始めるきっかけとなった。例えば、盆踊りや運動会などは子どもたちと一緒に楽しみながら行っているが、これまで「子どもがああしない、こうしない」などと言ってきたが、考えると子どもだけではなく自分たちがやっていなかったと反省した。先日は、五平餅づくりを行ったが、子どもたち以上に自分たちが楽しませてもらった。

また、活動している地域では高齢化が進んでいると実感。自身の年代の方々が一同に入ってきた地域。若い頃は一人でも大丈夫と思っていたが、今はそれでは難しい。そのあたりをどのように地域でフォローできるかを検討していきたいと考えている。

C 委員 子どもが関わることによって、子どもだけでなく大人も変わるのかもしれない。

I 委員 高齢者の活躍をどうするかが最もの課題であると思うが、枠組みやスキームなど他の自治体の事例などがあれば教えてほしい。

C 委員 高齢者の活躍に関しては、課題を解決するために行くと負担感が生じて動かなくなるということがある。その意味では、子どもたちと交流すると「楽しい」「ありがとう」「すごい」と言われることで、高齢者自身も自分のプライドを傷つけられず、また子どもと関わる中で、子どものことを大事に思い始めることがある。例えば、先ほど F 委員から話のあった定年延長の時に 60 歳で役職定年であるとか、就きたくない仕事に回されてしまうというのはプライドが傷つけられる。課長まで務めた方々の給料が半額になること、仕事がないために就きたくない仕事をやることでプライドが傷ついてしまい、やる気が起こらなくなる。その意味では、誰もが尊厳を持っているし、自分を認めて欲しいし、自分が生きてきた経験を否定されたくないはず。これは子どもも大人も同じ。互いが認め合える関係を築きながら、自分が子どものために一生懸命になると子どもから「すごい」「ありがとう」などと言われることや、子どもも「すごいね」と言われることや認めてもらえるなどの関係ができると、良い関係ができ、肯定感が高まってくることは経験的にわかってきている。このようなことを広めていくなかで新しい動きを作っていくことが大事。もっと言うと、地域課題を解決するために「これやりましょう」と行政はやりがちであるが、最初は動くが途中から疲れてしまい動かなくなることがよくある。それも認め合う関係や楽しい、嬉しいといったことにつながるような作り方が大事になるかと思う。これは、経験してきたことでわかる話かもしれない。

- I 委員 わくわく感をこれからの人生にどう取り込んでいくかという視点が大事となるとわかった。具体的にどうする、誰がどのようにという視点になると課題解決の形になってしまうのかもしれない。
- C 委員 課題解決することよりは、むしろ迂回するようになってみても楽しいことから入る。例えば、ものづくりを始めていく中で楽しくなると、「これやりたい、あれやりたい、今度こんなことやりたい、今度こんなことやってみよう」という形で課題解決に動くことはある。そういった関係を作っていくことも大事とは思いますが、直球で課題解決とすると「大事だからやりましょう」という方がいるが、負担が増えるので動かなくなることがよくある。
- J 委員 一番の抱えている問題は受講生の高齢化である。以前の高年大学が始まってから20年以上が経過するが、当時の受講生の多くは60代前半であった。現在のシニアアカデミーでは、平均年齢が72歳となり、80歳の方もいらっしゃる。その方々にシニアアカデミーで学んだことを地域に戻って還元していただくという考えで実施をしているが、この年齢になってから地域に出て何をするのか、というのが率直な感想である。例えば、子どもと楽しむ時間、仲間と楽しむ時間、地域で楽しむ時間を過ごすことが重要であるのかもしれない。現在の講座内容を見直す時期に来ていると痛感している。2年間、コロナでまともに講座を開催することができなかったが、今年度からはようやく動き出した。
また、生涯活躍部だけでなく他部署でも高齢者の活躍に関する取り組みを行っていることがある。今後、行政に頑張ってもらいたいことの一つは横のつながりである。課をまたいだ交流ができると更に良い事業が展開できるのではないかと思う。
- C 委員 これまでの社会や様々な事業は年齢や対象で分けるなどでセグメントされてしまっているため、それをどうつなげていくかが大切である。多世代交流の話や人生100年で考えるということに全て関わってくると思う。
- K 委員 私の感想になってしまうが、C委員の話聞いて凄く附に落ち、色々考えさせられた。子どもたちが自分の人生を作っていく、という話が最も附に落ちたが、その前に交流館は高齢者の活躍や地域課題の解決などの重たいことが言われている。地域課題の解決となると交流館の利用のほとんどを占める高齢者がキーマンとなると思われる。高齢者の方々がそれを担えるかと考えると、介護予防で元気になっていることが大事であったり自治区の担い手不足など、それ自体が課題となっている。子どもに目を向けた時に子どもが主体となれる機会が少なく感じ、子どもと高齢者を結ぶことが理想ではあるが、中学生は非常に忙しく、地域に出たくても出られない状況で、こちらが機会を提供しても集まらない。交流館では、自治区や学校などとつながっているが、交流館だけでは解決が難しいこともある。子どもが楽しく主体になれるような取組みをみんなで考えていく支援の在り方が大事なのではない

かと皆さんのお話を聞いて感じた。

B 委員

活動する中で、行政の縦割りを感している。ただ、縦は縦で大事ではあると感じ、民間側で横連携をしていくときにコーディネーター役がない状況である。高齢分野であれば地域包括支援センター、障がい分野であれば、障がいの専門員など、専門のコーディネーターがいるものの、生涯学習するときのコーディネートを誰に相談したらよいか分からない。交流館やシニアアカデミーに相談しても別の拠点を紹介されてしまう。そこに、全体を掌握しているコーディネーターが存在し、中学生やシニアの起業塾のような面白いことが起こるような人材を育てることを学びをとおして行えるとよいと感じている。

面白い予算提案の形があると面白い活動が自然と起きるのかもしれない。

E 委員

教育や福祉関連のお役を引き受けており、交流館の運営推進委員も 2～3 年務めており、これで地域の社会教育を考えられると思ったが、議論されるのは、交流館の運営についてであった。その他、話を聞いても地域の社会教育分野を担当している管轄が行政に存在しないような気がしており、実際には市の生涯学習は市民活躍支援課が担当していると思うが、地域という社会の中で皆で学んでいこうというのを地域と行政が一緒になって考えるところが存在しないような気もしている。

C 委員

色々な縦割り・横割りがあと思うが、従来の工業社会に対応する形で行政組織も構築された。色々なところが、自前主義で自分のところで完結させるような作り方となっている。そこは、耐用年数が過ぎてきている感じを皆さん受けているような気がしている。

L 委員

色々なお話を聞きながら、思い浮かぶのは、仕事で出会う方、家族が関わっている方、近所の方の顔が浮かんでくるが、自身、疑問というか洩れるのではないかと感じたこととして、豊田市では土日にイベント等の企画を行っている印象が強いが、そこに出向けない子が存在している。いくら企画をしてもそこにつながる手立てをもっていなかったり、状況的にそれが許されない子が一定数いるのは確かなことで、楽しいことをやりたいけれどやれない子にも目を向けて欲しいと感じた。現在、子どもたちや 20 代前半で仕事を辞めた方などと接しているが、様々なスキルや知識を持っている方が多い。高齢者の方も生きた知恵として、梅干しをつけるとか味噌を仕込むなどの知恵をお持ちであるが、小学校の家庭科でも決まった箇所を縫っているような授業だけでなく外れたボタンを縫う練習に高齢者の方の経験が生かせるのではないかと思う。土日に限らず、学校のある時間であったり、障がい者施設や医療施設とつながり学校に来られない子にも学べる場が提供されると良いと感じる。

C 委員

誰一人取り残さないという SDGs の理念であるが、それも基本として考えながら日常生活の中で文化や知恵とかを伝えていくことが認め合う関係にもつながっていくのではないか。